小學國語讀頌本

尋常科用

卷七

文部省

41396

教科書文庫

4

810

31-1940

2000.0
81528

資料室

小學國語讀本

尋常科用

卷七

文部省

広島大学
教
81528
図書

3B
810
昭15

もくろく

第一　海……一
第二　弟橘媛……三
第三　潮干狩……七
第四　わざくらべ……十四
第五　からかさ松……十九
第六　朝……二十一
第七　苗代の頃……二十四
第八　木の高さ……二十八
第九　笛の名人……三十二
第十　縁日……三十七
第十一　朝顔の日記……三十九
第十二　兵營だより……四十七
第十三　錦の御旗……五十四
第十四　鐵工場……五十九
第十五　大阪……六十二
第十六　木下藤吉郎……七十三
第十七　油蟬の一生……九十三
第十八　五作ぢいさん……百
第十九　夕立……百七
第二十　笑話……百九
第二十一　安倍川の渡し……百十三
第二十二　夕日……百二十六
第二十三　お月見……百二十八
第二十四　鳴子……百三十二
第二十五　横濱港……百三十四
第二十六　乃木大將の幼年時代……百四十二

第一　海

晴れやかな朝の海。
雲が切れる、
かもめが飛ぶ。
吹く風はさわやかに、
ふむ砂はさくさくと鳴る。

岩角に立てば、

漕

沖の波は、さや〳〵と
喜びをさゝやき、
いそのしぶきは、ひや〳〵と
す足にをどる。

やがて、かけ聲勇ましく
漕出す船、
船は見る〳〵遠く、
人も帆も、金色の光に包まれる。

烈
忽

あゝ、朝の海。

第二　弟橘媛

日本武尊は、相模の國から、船で上總の國へお向かひになつた。

船が沖合へさしかゝると、急に烈しいあらしが起つて來た。風は忽ち大波を巻起し、波は船を木の葉のやうにゆり動かした。もう進むことも退くことも出來なかつた。お供の

決　勅

者は、皆まつさをになつて船底にひれふした。尊に從つて同じ船にお乘りになつて居た、おきさき弟橘媛は、「これは海神のたゝりであらう。此のまゝでは尊の御命が危い。」とお考へになつた。媛のやさしいお顏には、きつと御決心の色が浮かんだ。媛は、尊に

「私は、お身代りになつて海神の心をなだめませう。皇子は、勅命をはたして、めでたく都へお歸りになりますやうに。」

狂

とおつしやるが早いか、荒狂ふ波間に、ざんぶとお飛びこみになつた。

ふしぎに、風は止み波は靜まつた。尊は、無事に上總の國にお着きになつた。

七日たつて、波にゆられゆられ、一枚の櫛が海

墓

べへ流れ着いた。それは弟橘媛のお櫛であつた。尊は、其のお櫛をさめて、媛のお墓をおつくりになつた。

定

東國の賊を平定して、尊が西へお歸りになる途中、相模の足柄山をお通りになつた。はるかに見えるのは、相模の海である。尊は、なつかしげに

「あづまはや。」

と仰せられた。媛の眞心を思ひやつて、「あゝ、

途

眞

妻以

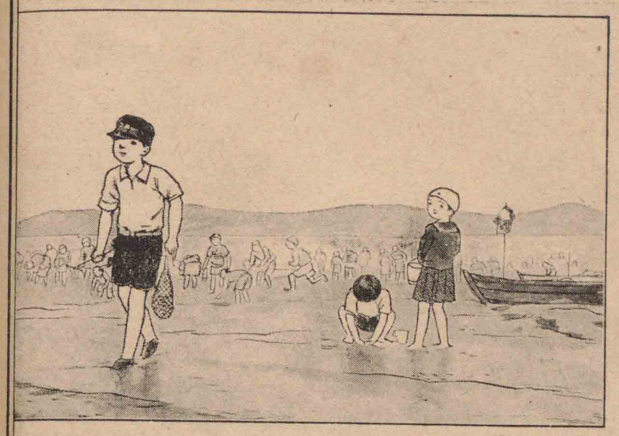
我が妻よ。」とおつしやつたのである。それ以來、此のへんの國々を「あづま」といふやうになつたといはれて居る。

潮干

第三　潮干狩

舟は岸をはなれました。もやが水の上に立ちこめて居ます。不意に白い鳥が飛立ちました。見ると、それはかもめでした。川口近くになると、潮干狩の舟が、幾さうも幾

洲



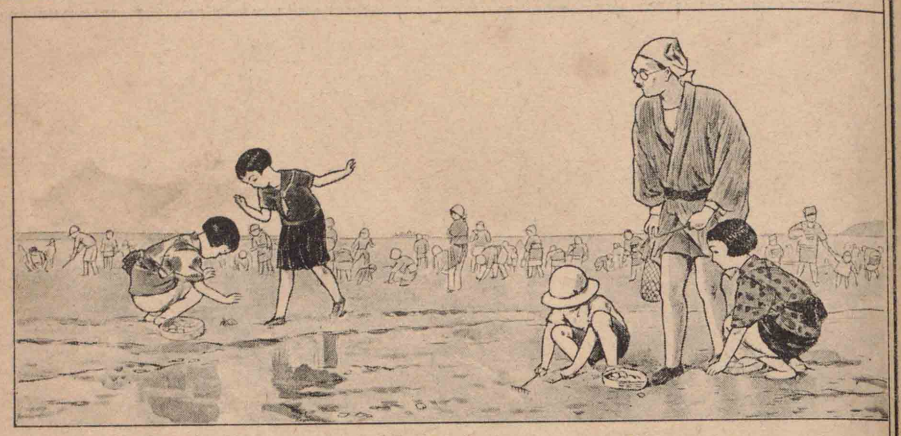
さうも集つて來ました。潮がずん〳〵引くので、舟は忽ち海へ出ました。にいさんが「我は海の子」を歌ひ出しました。私も雪子さんも、一しよに歌ひました。

だん〳〵潮が引いて、もうそこ〻に洲が見え出しました。

船頭さんが、

「皆さん、そろ〳〵おしたくですよ。」

足袋



と言ひましたので、みんなが、くつしたをぬいで足袋にはきかへたり、着物のすそをばしよつたりしました。

船頭さんが、さをを突立ててそれに舟をつなぎました。

さうして、其のさをの先に、赤いしるしのあるはんてんをしばり附けて、

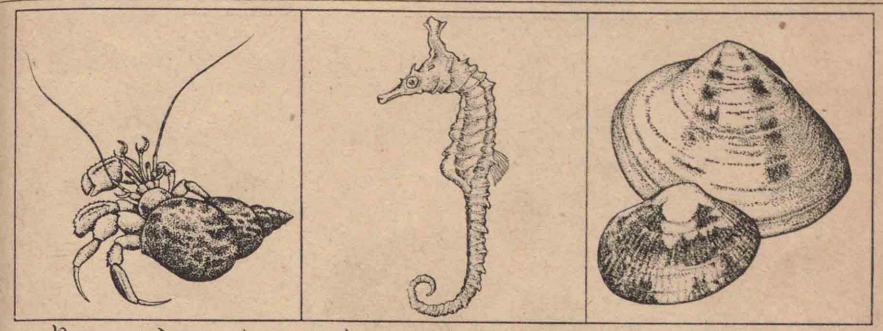
冷　蛤

「皆さん、これが目じるしですよ。」
と言ひました。にいさんが一番先に海へ下りました。私も雪子さんも、續いて下りました。水は、思つたより冷たうございました。おとうさんも、妹も、弟も、みんな下りました。小さいくまでで砂をかくと、おもしろいやうにあさりが出ました。時々手ごたへがして、大きな蛤も出ました。浅い水たまりを歩くと、足の裏がぬるりとしたので、おさへて見た

程

ら小さなかれひでした。
「雪子さん、かれひよ。」
と言つて、つかんで見せると、ふりかへつたのは知らない人でした。
潮がすつかり落ちて、海は陸のやうになりました。舟で來た人も陸から來た人も、入りまじつて、何百人か數へきれない程居ます。見ると、向かふの方で、雪子さんや妹は、何を取つたのか、きやつきやつと大さわぎをして居ま

中



す。

其の中に潮がさし始めて來ました。おとうさんが、

「もう舟にお上り。」

とおつしやつたので、みんな舟にもどりました。めい〳〵ざるをかしげて、え物を見せ合ひました。妹と雪子さんのざるには、やどかりがたくさん居ました。にいさ

何時

んは、たつのおとしごを一匹取つたので、大じまんでした。

舟の中で、ゆつくりおべんたうをたべました。

潮がだん〳〵さして來て、何時の間にか洲が見えなくなりました。

舟は、上げ潮に乗つて、陸の方へ動き始めました。川口にかゝつた時、ふりかへつて見ましたら、もう廣い海には、潮干狩の舟は一さうもありませんでした。

工
好

第四　わざくらべ

昔、飛騨の工といふ大工と、百濟の河成といふ畫かきがあつた。二人は、共にすぐれた名人で、又仲の好い友だちであつた。

或日、工が河成の所へ使をやつて、

「今度新しいお堂を建てたから、見に來て下さい。壁に畫をかいてもらへば、まことにありがたい。」

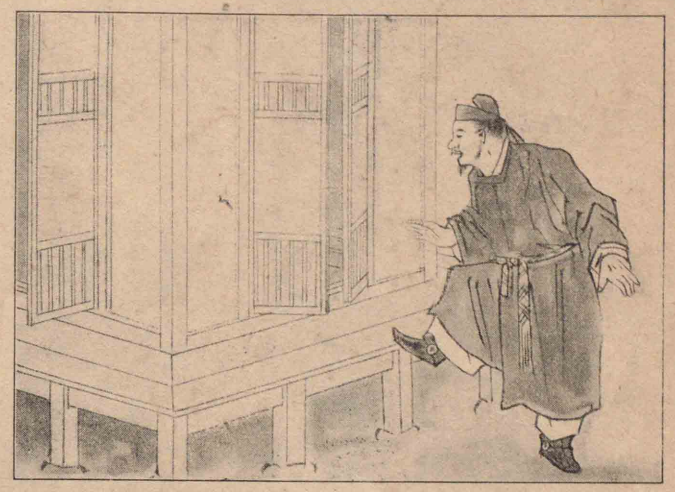
側

と言つた。

河成は、さつそく承知して出かけて行つた。見ると、お堂といふのは一間四方の建物で、四方の戸は皆あけはなしてある。工が、

「まあ、中へはいつて、ゆつくり見て下さい。」

と言つたので、河成は、何心なく南側の戸口からはいらうとした。すると、其の戸が急にぴたりと閉ぢた。ふしぎに思つて、今度は西側の口からはいらうとすると、又其の戸がしま



つて、さつきしまつた南側の戸があいた。北からはいらうとすれば、北の戸がしまつて西の戸があき、東からはいらうとすれば、東の戸がしまつて北の戸があく。河成は、お堂のまはりを廻るばかりで、中へはいる事が出來ない。工は、これを見て聲高く笑つた。河成は、くや

しく思つたが、仕方がなく其のまゝ家へ歸つた。

それから數日後の事である。工の家へ河成から使が來て、

「お目にかけたいものがあるから、ぜひ來て下さい。」

と言つた。工は、「はゝあ、此の間の仕返しをする氣だな。」と思つたが、度々呼びに來るので出かけて行つた。すると、召使の者が出て來て、

「どうぞ、お上り下さい。」

と言つた。

言はれるまゝに、座敷へはいらうとして戸を開くと、驚いた。中には、くさつてぶく〳〵にふくれた、大きな死がいが横たはつて居る。何ともいへないいやなにほひさへする。工は、思はず「あつ。」と聲を立てて逃出した。すると河成が、笑ひながら座敷から顔を出して、

「どうしたのです。まあ、おはいりなさい。」

と言つた。

恐る〳〵近寄つて見ると、死人と見えたのは、ふすまにかいた畫であつた。

二人は、思はず顔を見合はせてから〳〵と笑つた。

第五　からかさ松

村の西にくぬぎ林がある。それを通り抜けて、だら〳〵坂を上ると、道ばたに大きな松が

幹

香

一本ある。幹が二かゝへもあつて、枝がからかさを廣げたやうに出て居るので、村の人は、これをからかさ松と呼んで居る。

其の松の下に、石の地藏(ぢざう)樣が立つていらつしやる。雨ざらしになつて居るが、何時もお花が上つて居る。時々は線香の上つて居ることもある。

軒

煙草

南

からかさ松の少し先に、小さな茶屋が一軒ある。おばあさんが一人ぼつちで、菓子や煙草を賣つて居る。此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが、ずつと前から南洋へ行つて居るといふことだ。

第六　朝

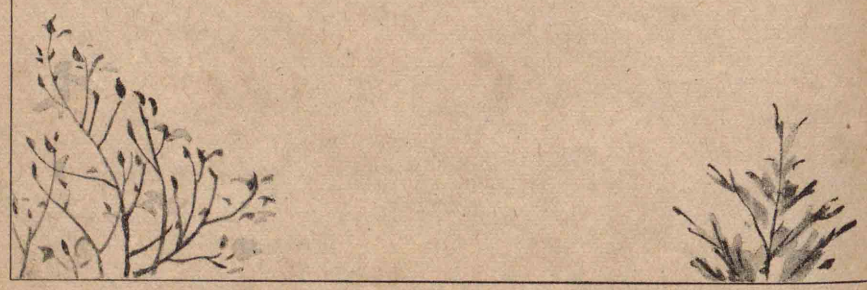
朝が來た。

ほがらかな、
さわやかな
朝が來た。

のきばでは、
子雀の
晴れやかな
ものがたり。

此の若葉、
あの若葉、
日の光
ふりそゝぐ。

此のこずゑ、
あのこずゑ、
大空は
あさみどり。



部

掘

第七　苗代（なはしろ）の頃

春の少し暖い晩、「くゝ、くゝ、」。と、蛙の鳴く聲がする。

其の頃から、晝間は、廣いたんぼの一部で、もう苗代の仕事が始る。　眞黑な牛が、いう〳〵と引いて行くからすきのあとに、掘返され

泥

耕

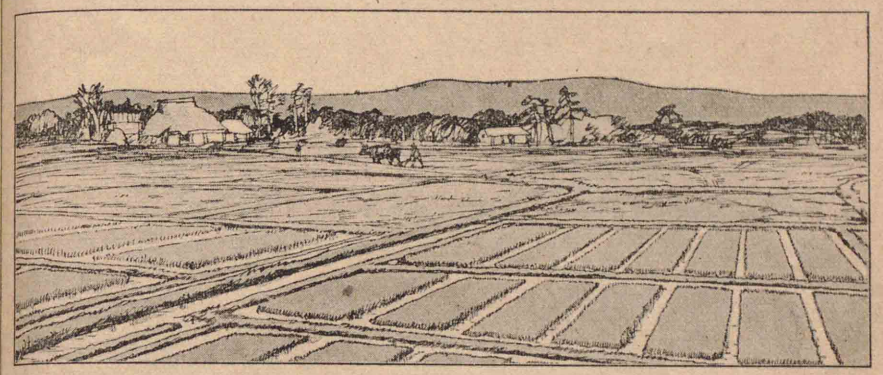
種

た新しい土が、暖い日光に照らされる。土が掘返され、くれ打がすむと、田に水がなみなみと張られる。　今度は、牛がまぐはを引いて、泥水の中を行つたりもどつたりする。　かうして、田の土は、だん〳〵こまかく耕されて行く。

夜、遠田で鳴く蛙の聲が「ころ〳〵、ころ〳〵。」と、そろ〳〵にぎやかに聞え出す。

種まきがすんで十幾日、淺い水の上に、二糎か

苗揃　形　輕



三糎ぐらゐ、若々しい緑の苗が出揃つて行くのは、見るから氣持のよいものだ。ちやうど、たんざく形の緑の敷物を、程よく間を置いて敷並べたやうである。

苗が二十糎ぐらゐにのびて、葉先が朝風に輕くゆれる程になると、廣いたんぼは次第ににぎ

やかになる。そろ〳〵汗ばむ程暑くなつた日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働く。こゝの田も、あそこの田も、掘返した土のかたまりの間には、もうひた〳〵と水がたゝへられて居る。

蛙のすみかが、かうしてたんぼ一ぱいに廣がるのだ。晝間は、働く人や牛にゐんりよをするやうに聲をひそめて居るが、夕方から夜になると、自分たちの世界だといはんばかりに

さわぎたてる。家の前も、後も、横も、まるでタ立の降るやうに、蛙の聲で一ぱいである。静かだといふなかの夜も、此の頃は、雨戸をしめて始めてほつとする。

もう田植が間近いのである。

第八　木の高さ

僕の學校に、大きな杉の木が一本ある。高さはどのくらゐあらうか。中村君は八米ぐら

ゐだと言ひ、石川君は十米以上もあると言ふ。みんながいろ〳〵な事を言ふが、誰もまだ其の木のほんたうの高さを知つて居る者はない。僕は、どうかして一度計つてみたいと思つて居た。

其の中に僕は氣がついた。朝は物のかげが非常に長いが、だん〳〵ちゞまつて、お晝頃になると、かげの方が其の物より短くなり、それから又だん〳〵と長くなつて行く。そこで

違　　棒

僕は、一日の中に、物の高さと其のかげの長さとが、ちやうど同じになる時があるに違ひないと考へた。

此の間の日曜日に、石川君をさそつて學校へ行つた。　さうして、杉の木のそばに一米程の棒を立て

て、何べんとなく棒のかげの長さを計つてみた。　さうする中に、思つた通り、棒の長さとかげの長さとが、ちやうど同じになつた。　そこで、すぐに木のかげを計つた。

きつちり十二米あつた。

翌日、先生に此の事をお話したら、先生は、

「それは、すばらしい思ひつきです。　さうすれば、どんな物の高さでも計ることが出來ます。　物の高さと其のかげの長さとが、同

泊　現

じになることは、一日の中に、午前と午後に一回づつあるのです。」

とおつしやつた。

第九　笛の名人

笛の名人用光（もちみつ）は、或年の夏、土佐（とさ）の國から京都へ上らうとして、船に乗つた。

船が或港に泊つた夜の事であつた。どこからかあやしい船が現れて、用光の船に近づい

途　樂

たと思ふと、恐しい海賊がどや〳〵と乗移つて來て、用光を取圍んでしまつた。

用光は、逃げようにも逃げる途はなく、戰ふにも武器はなかつた。とても助らぬとかくごをきめた。たゞ自分は樂人であるから、一生の思出に、心ゆくばかり笛を吹いてから死にたいと思つた。それで海賊どもに向かつて、

「かうなつては、お前たちにはとてもかなはぬ。私もかくごをした。私は樂人である。

世曲

今こゝで命をとられるのだから、此の世の別れに一曲だけ吹かせてもらひたい。さうして、こんな事もあつたと、世の中に傳へてもらひたい。」

と言つて、笛を取出した。海賊どもは、顔を見合はせて、

「おもしろい。まあ、一つ聞かうではないか。」

と言つた。

これが名人といはれた自分の最期だと思つ

音醉彼管

て、用光はとくいの曲を静かに吹始めた。曲の進むにつれて、用光は、自分の笛の音に醉つたやうに、たゞ吹きに吹いた。彼の前には、もう死もなかつた、生もなかつた。たゞ一管の笛に思をこめて、天地にひゞけと吹鳴らした。

雲もない空には、月が美しく輝いて居た。笛の音は、高くひくく、波をこえてひゞいた。海賊どもは、たゞ一心に耳をかたむけて聞いた。せき一つする者もない。目には涙さへ浮かべて居た。

やがて曲は終つた。

「だめだ。あの笛を聞いたら、惡いことなんか出來なくなつた。」

海賊どもは、其のまゝ船を漕いで歸つて行つ

た。

第十　縁日（えんにち）

月の八日は御縁日。
夜のあかりに美しく
並ぶお菓子屋おもちや店。
ぴいと鳴るのはゴム風船。
涼しい風にくるくると、

色

魚町曲市

まはるは五色の風車。

客を呼ぶ聲笑ふ聲、

鉢巻しめたバナヽ屋の

身ぶり手ぶりもおもしろい。

そこの木かげは金魚賣、

横町曲れば植木市、

寄つてくづれる人の波。

人にもまれて送られて、

觀音(くわんのん)堂に來てみれば、

香の煙がゆら〳〵と。

第十一　朝顔の日記

五月十四日　日曜日　晴

暖い日曜日ですから、今日は朝顔の種をまかうといふのでひるから其の用意をしました。

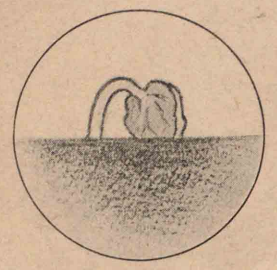
儀行

にいさんが、物置から古いみかん箱を取出して來て、それを淺く作りなほしました。四時頃、おかあさんに教へていたゞいて、にいさんと二人でまきました。箱に土を入れ、よい種を二十程、行儀よく並べて、其の上に土をふりかけました。さうして、水をやりました。

これから、毎日、午前と午後と二回水をやるのですが、私たちは學校へ行きますから、午前の水は、おかあさんに受持つていたゞくことにしました。

五月二十二日　月曜日　晴

學校から歸ると、おかあさんが、「君子、朝顔の芽が出ましたよ。」とおつしやつたので、急いで庭へ出て見ました。ほんたうにかはいゝ芽が、一本出て居ました。莖がうす赤で、黄色い葉が重なつたまゝ、下を向いて、其の先は、まだ土から出きらないで居ます。「莖が赤いから、赤い花が咲

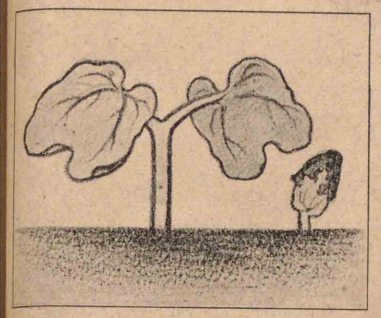


くでせう。」と、おかあさんがおつしやいました。

五月二十三日　火曜日　晴

昨日（きのふ）の芽が、今日はまつすぐに起上りました。葉は、二枚重なつたまゝ、上を向いて居ます。

五月二十四日　水曜日　曇



又、新しい芽が、頭に黒い皮をかぶつて出て來ました。一昨日（をとゝひ）出た方は、すつかり二葉が開いて、緑色になりました。

五月二十五日　木曜日　晴

今日も、又、新しいのが二つ出かゝりました。昨日出たのは、まだ皮を着けて居ますが、葉がずつと大きくなりました。

五月二十八日　日曜日　晴

昨日雨が降つたので、今日は六つも芽が出ました。二葉になつたのは、みんなで七つあります。後から出るもの程、大急ぎでのびて、早く二葉にならうとするやうです。さう思ふ

魂　最初　柔

と、どれもこれも、魂でもあるやうな氣がして私は、朝顔がかはいくてたまらなくなりました。

莖は、赤のこいのや、うすいのや、又うす緑のがあります。うす緑のは、白か、うすい色の花が咲くのださうです。

六月一日　木曜日　曇

みんな出揃つて二葉になりました。最初に出たのは、もう二葉の間から、小さい本葉が柔

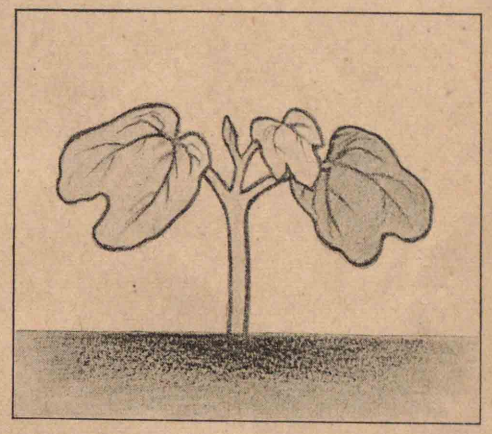
かい毛をかぶつて出て來ました。

六月十日　土曜日　晴

二十本とも本葉が出揃ひました。中には二枚出て居るのもあります。大きい本葉は長さが二糎ぐらゐ、小さいのでも一糎ぐらゐはあります。

今日はお天氣も好いので、午後、又おかあさんに教へていたゞいて、にいさんと朝顔を鉢に植ゑました。おかあさんが、冬こやしをかけ

選



て仕立てておいて下さつた土に、少し砂をまぜて鉢に入れ、勢のよい苗を選んで、一鉢に一本づつ植ゑました。みんなで十鉢になりました。

残つた苗は、庭の垣根にそつて、大事に植ゑてやりました。

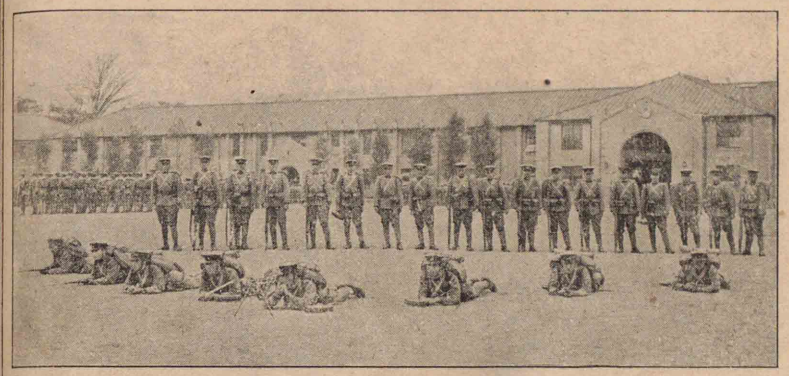
「あと一月餘りもたつと、そろ〳〵花が咲きますよ。」と、おかあさんがおつしやいました。

活務

第十二　兵營だより

國雄君、お手紙ありがたう。叔父さんや叔母さんもおかはりなく、君も元氣ださうで、何よりです。僕も、入營以來いたつて元氣で、軍務に服して居ます。此の頃では、もうすつかり兵營生活になれて、愉快な日を送つて居ます。

起



君は軍人が好きだから、今日は少し兵營生活の様子をお知らせしませう。

朝は起床ラッパで飛起きます。さうして、かわいたてぬぐひで、體が赤くなる程こすります。やがて朝の點呼も終つて、顔を洗

室　教練

ひすつかり室をさうぢしてから、朝御飯をたべます。

午前と午後に教練がありますが、時には、朝早くから演習に出かけることもあります。さうして、夕方おなかをぺこ〳〵にして歸つて來ます。すぐに武器の手入れをしてから、食事をしますが、其のおいしいこと、大きなアルミニウムの食器の御飯を、

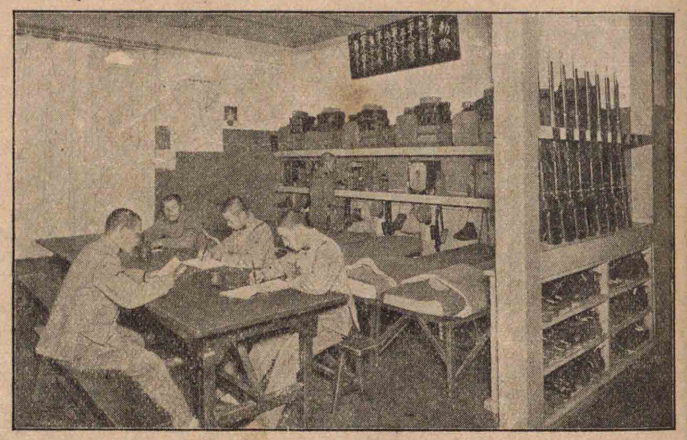
最　汁粉　整

見る〳〵平げてしまひます。夕食後は僕等の最も樂しい自由時間で、其の間に思ひ〳〵の事をします。酒保へ行つて、お汁粉や大福餅をたべながら、お國じまんの話に花を咲かせるのも此の時です。

午後八時に夜の點呼があり、整列して、「今日も無事に終りました。」といふ心持で、「一、二、三、四、、、、」と、大きな聲

號(号)　奉讀　明日　注

で番號をとなへます。續いて、みんなで勅諭を奉讀して後、班長殿から、明日の事について注意を受けます。九時には消燈ですから、其の前に日記をつけたり、手紙を書いたりします。



裝寒庭

僕等の寢起きする室の中央には、長い机があります。兩側には寢臺が並び、壁ぎはには棚があつて、めいめいの持物が、きちんと置いてあります。いざといふ場合には、暗がりでも武裝することが出來ます。

入營當時は、寒風吹きすさぶ營庭で教練したり、冷たい水で、食器を洗つたり洗濯したりするのに、中々ほね

常精神

が折れますが、だん〳〵なれると、日日の仕事が、おもしろく愉快になります。

兵營は、いはば一つの大きな家庭で、其の日常生活の間に、軍人としての精神をやしなふ所なのです。

中隊長殿がおとうさん、班長殿がおかあさん、僕等は子供で、兄弟のやうに仲好く助け合つて、勉強したり教練したりします。

分

あ、もう九時五分前です。すぐ消燈ですから、これで止めます。皆様によろしく。さやうなら。

年　月　日　　春山新一

原田國雄君

第十三　錦の御旗

征伐

大塔宮は、北條高時征伐のため、兵をお集めにならうとして、大和の十津川から高野の方へ

配

探

お向かひになつた。お供の者は、わづかに九人であつた。

途中には敵方の者が多かつた。中にも、芋瀬の荘司は、宮のお通りになることを知つて、道に手下の者を配つて居た。

宮は、どうしてもそこをお通りにならねばならなかつた。

お供の中に、村上彦四郎義光といふ人があつた。此のへんの敵の様子を探るために、思は

眉　家

ず時を過して、宮の御後から急ぎ足に道をたどつて來たが、ふと見ると、向かふに、日月を金銀で現した錦の御旗を押立てて居る者がある。　義光は、ふしんの眉をひそめた。　あれこそは大塔宮の御旗である。　もしや、宮の御身に何事か起つたのではなからうか。　義光は胸をとゞろかした。

急いで近寄ると、芋瀬の莊司が、家來の大男に宮の御旗を持たせて、さもとくいげに、何か聲

筋　怒

高く話して居るところであつた。

義光は、大聲に

「見れば尊い錦の御旗、どうしてそれを手に入れたのか。」

とつめ寄つた。

莊司は、わうへいに答へた。

「大塔宮を御道筋に待受け申し、此の御旗を此の莊司が手に入れたのだ。」

義光は一時に怒を發した。

奉雷

「それはけしからぬ。恐れ多くも宮の御道筋をふさいだ上に、錦の御旗をけがし奉るとは。」

雷の如き聲と共に、御旗をうばひ取り、かの大男を引つかんで、まりのやうに投げつけた。

言去忠義

芋瀬の莊司は、もう一言も發しようとしなかつた。

錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、いう〳〵と其の場を立去つた義光は、やがて宮に追附き奉つた。

大塔宮は、義光の忠義を心からお喜びになつた。

第十四　鐵工場

機

工場の
高い天井、
其の下に
動く起重機は、
生きて居るやうに、
あらがねを
爐に持運ぶ。
夜も晝も、

械

爐の火はもえて、
火の柱、
ほのほの柱。
流れ出る鐵は、
青白い
火花を散らす。

ものすごい
機械のひゞき、

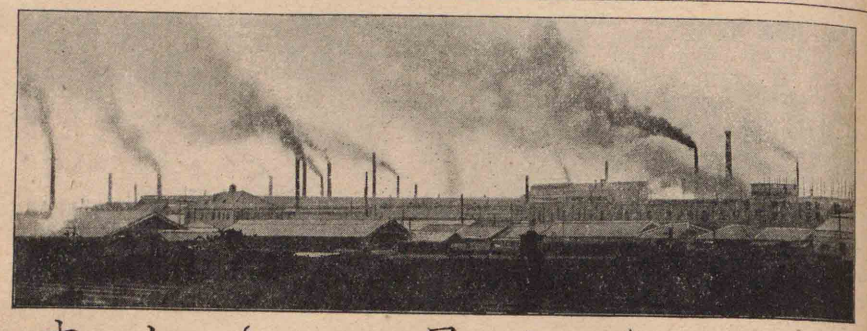
腕　筋肉　阪

其の中に、
働く人の
腕の太さよ、
筋肉の
たくましさよ。

第十五　大阪

汽車で大阪驛に近づくと、晴れた日でも、空がどんより曇つたやうに見えます。それも其

俗　煙突　各種盛

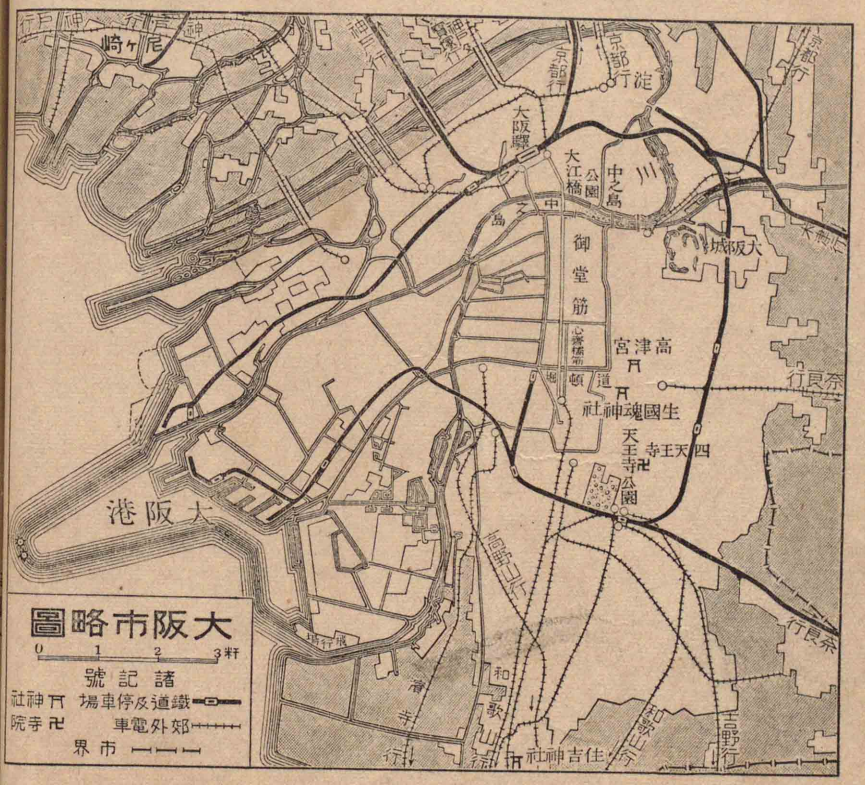


のはず、大阪は俗に煙の都といはれ、大小八千以上の工場がこゝにあつて、林のやうに立ち並ぶ煙突から、たえず黒い煙をはき出して居るのです。大阪は、實に日本第一の工業都市で、各種の工業がはなはだ盛です。

大阪は、又、昔から商業の盛な所です。市を流れる淀川は、幾筋にも

通組

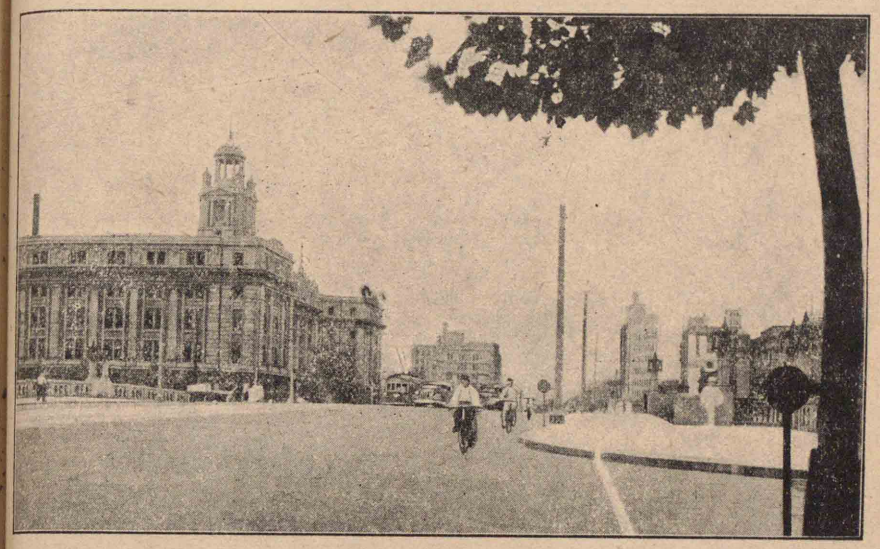
分れて、西の大阪灣に注いで居ます。其の川水は、市内幾十といふ堀から堀に通じ、川と堀とは、まるであみの目のやうに組合つ



産在達

て居ます。大阪が水の都ともいはれるわけは、こゝにあるのです。そこで、大阪の港に集つて來る船の積荷は、小船で川や堀を傳つて大阪の町々に上げられます。又大阪の物産も、多くは堀や川を通つて港へ送られます。かうして、多くの品物が、自由自在に集つたり散らばつたりするので、しぜん大阪が一大商業都市として發達したのです。

水の都ですから、大阪には大小千何百といふ



橋があります。大阪驛からほゞ南へ、御堂筋といふ大通を進むと、やがて、大江橋を渡つて中之島といふ所へ來ます。それは淀川の中にある細長い島ですが、此の島に向かつて、北から南から、かけ渡された橋ばか

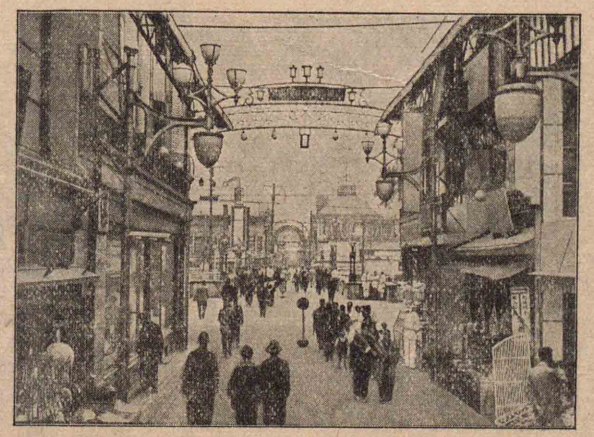
りでも二十もあつて、まるで、中之島をたくさんの串でさし通したやうになつて居ます。

中之島及び其の附近には、近代的な高い建物が並び、島の東端には中之島公園があります。公園はさして廣くはありませんが、大川をめぐらした眺は大阪らしい景色で、其のまゝ水の公園といつてよいくらゐです。

一番にぎやかな場所は、市の中央、道頓堀附近の町々です。心齋橋筋にはりつぱな商店が

復興　端

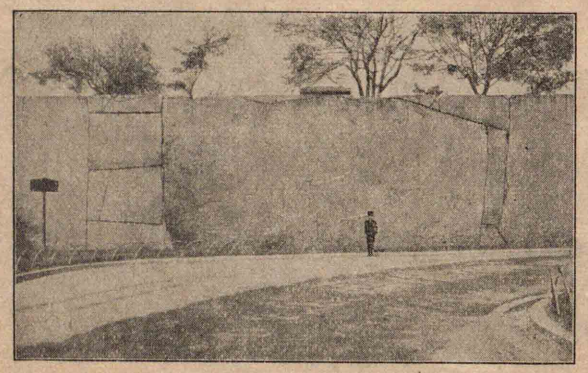
並び、堀端の町には映畫館や劇場があつて、人の波が後から後から押寄せます。夜になると、此のへんは一たい電氣の光が輝いて、町も水も、一面に火を流したやうです。



名所としては、先づ大阪城があります。豐臣秀吉の建てた城で、近年復興された天守閣に上ると、廣い大阪は一目に見

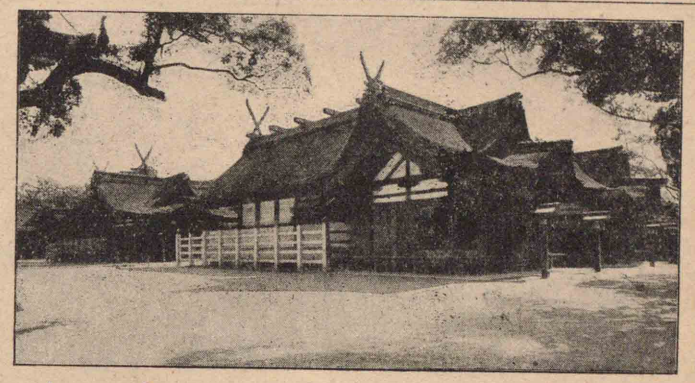
縱　有

えます。石垣の石の大きいのは有名ですが、中でも縱六米、横十一米といふすばらしく大きい石には、誰でもびつくりさせられます。



仁德天皇をおまつりしてある高津宮や、其の近くにある生

何寺樹

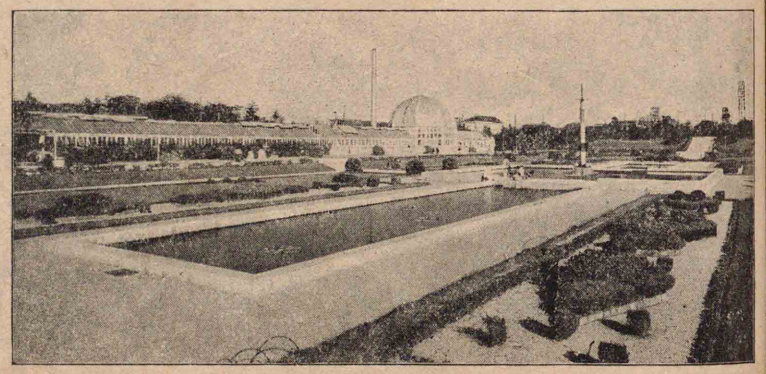


國魂神社、ずつと南にある住吉神社、又日本最初の寺といはれる四天王寺など、何れもゆゐしよの古い神社やお寺です。こゝに住吉神社は、境内が廣く、樹木が多く、社殿がおごそかに拜されます。四天王寺に近い天王寺公園には、美術館や動物園があり、又木立や、池や、運動場や、廣い花壇があります。かう

港壁

いふ所へ來ると、もう煙の都といふことなどは、すつかり忘れてしまひます。

大阪港は、防波堤が遠く續き、港内の岸壁には、一萬五千トンの大船が横附けにされます。大小の船の帆柱が林のやうに見えます。



市内には、自動車が走り、電車が走り、地下鐵道

郊誇

免民

も通じて居ますが、川や堀に幾千といふ船が通つて居るのは、大阪でなくては見られぬ景色です。　近郊電車の發達して居ることも、りつぱな飛行場のあることも、大阪の誇の一つになつて居ます。

昔、仁德天皇は、此の地に都をお定めになつて、堀江をお開きになり、又三年の間租稅を免じて、民のかまどの煙の立つやうになつたのを大そうお喜びになりました。　大阪が、水の都として發達し、又煙の都と呼ばれて、今日のやうな大都市となつたのには、まことに尊いいはれがあるといはねばなりません。

堺

第十六　木下藤吉郎

清洲城

（一）

織田信長の居た尾張の清洲城は、或日、大風で外廻りの塀や石垣がくづれた。　信長は、すぐ

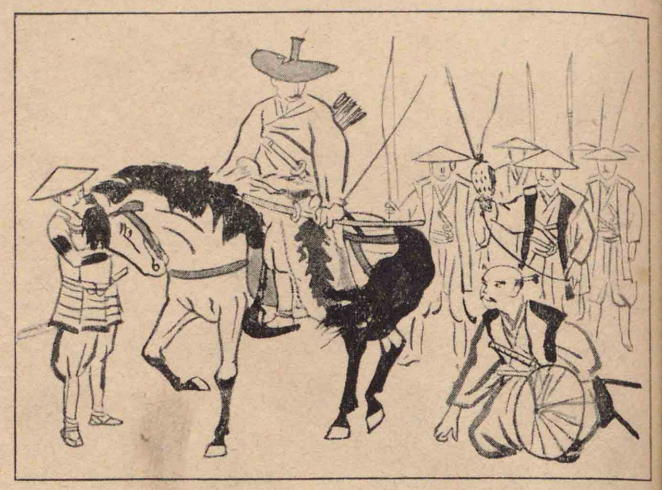
に役人に命じて、修理に取りかゝらせた。それから二十日ばかり過ぎた。信長は、家來を連れてたか狩に出かけた。

塀や石垣はまだ修理中で、大工や人夫が大勢働いて居たが、信長は、それには目もくれないで通つて行つた。

其の時、お供の中から大聲に、

「あゝ、あぶないことだ、あぶないことだ。」

と言ふ者がある。見ると木下藤吉郎であつた。



「だまれ。」

と、信長は、ことば烈しく叱つて、其のまゝ行かうとした。すると、前よりも一そう大きな聲で、

「あゝ、あぶないことだ、あぶないことだ。」

信長は火のやうになつて怒つた。

「さがれ。今日の供はかなはぬ。誰か、それを連れて歸れ。」

藤吉郎は途中から歸らせられた。

（二）

たか狩から歸ると、信長はさつそく藤吉郎を呼んで、

「そちは、なぜあんな事を言つた。其のわけを申せ。」

「殿には、お城の破損を御存じありませんか。」

「存じて居ればこそ、修理を申しつけて居るではないか。」

「ところで、わづか百間ばかりの場所の修理が、二十日もたつて、まだ何も出來て居りません。今、戰國の世の中に、四方の敵は、皆こちらのすきをねらつて居ります。私があぶないと申したのは、其の事でございます。」

「では聞くが、そちに申しつけたら、一體何日で出來るといふのか。」

「私にお申しつけあれば、三日で仕上げさせてごらんに入れます。」

「よし。城の修理をそちに申しつける。」

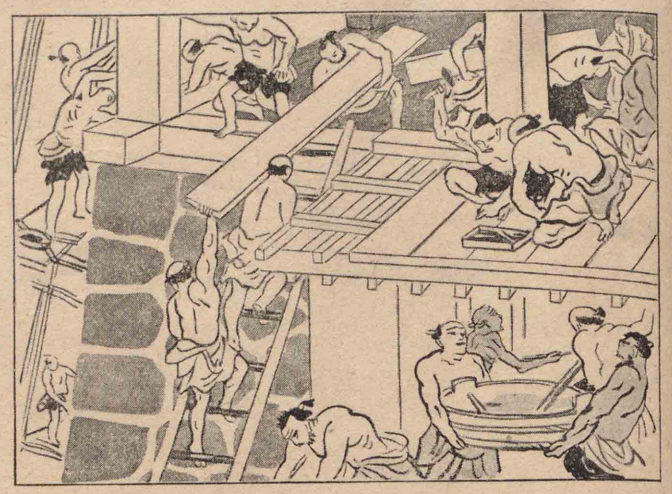
藤吉郎は承つて引下つた。

（三）

藤吉郎は、大勢の大工・石屋・人夫を集めて、

「今、戰國の世の中に、わづか百間程の修理が二十日たつても出來ぬやうでは困る。敵は何時攻めて來るかもわからない。攻めて來たら、第一お前たちの家族はどうなると思ふ。殿の仰では、明日から三日の間に、必ず仕上げよとのことだ。みんな一生けんめいに働いてもらひたい。」

族　必　割



とさとした。さうして、

「百間の場所を百に割つて、一間々々持場を

振　指圖　職

きめて働け。めい〳〵受持の場所を仕上げれば、それでよいのだ。決してわきを振向くな。」

と指圖した。

みんな此の指圖に從つて働いた。職人たちは、これまでのやうに、あつちこつち歩き廻つたり、一つ所に大勢寄つて、むだ話やむだな仕事をしたりしなくなつた。

わき目も振らず働いた。石垣が出來る、柱を

左　槍

立てる、ぬきを通す。かうして、三日目には、もう左官が壁をぬつて居た。

其の日の夕方、信長は家來を連れて普請場を見廻つた。工事はすつかり出來上つて居た。

短い槍と長い槍

（一）

信長の家來に上島主水（うへじまもんど）といふ者が居た。槍の名人といふので、自ら誇つて居た。

或日、信長が家來を集めて酒もりをして居た

限

時、話がたま〳〵槍のことに及んだ。信長は主水に尋ねた。

「一體、槍は長い方がよいか、それとも短い方がよいか。」

主水は答へた。

「短いのに限ります。長いと振廻しが不自由で、其の上、突く力が弱くていけませぬ。」

信長はだまつて居た。信長は長い槍が好きである。

ちやうど其の時、藤吉郎が出仕した。信長は、藤吉郎を見かけると、

「そちはどう思ふ。槍は長いのがよいか、短いのがよいか。」

藤吉郎は、

「それは私にお尋ねなくとも、そこに槍の名人上島が居ります。あれにお尋ねなさいませ。」

「まあ、よい。そちの考を聞かう。」

「さやうでございますか。私の考では、長い方がよいかと存じます。」

主水は、此のことばを聞いて、くわつとなつた。

「木下氏。長い槍がよいと言はれるからには、槍のことはよく御存じであらう。槍を以て仕へる此の私は、たゞ今短いのに限ると申し上げたところ。さあ、長短の槍について、くはしくお考を承りたい。」

「別に槍のことを深く知つて申したのではない。たゞ、殿がそちの考を言へと仰せられたから、私の思ふ所を申し上げたのです。」

「して、長いのがよいと言はれる理由は。」

「さやう。刀は短いより長い方がよろしい。槍も同じ道理と思ひます。」

「はゝ、それでは、まるつきり槍のことがおわかりになつて居らぬ。」

「あなたは短いのに限ると言はれるが、天下

議論　貸

の人が、皆さう考へるわけではありますまい。」

信長は、二人の議論を聞いて、

「どちらも口だけではわからぬ。どうだ、二人に五十人づつ中間（ちゅうげん）を貸さう、三日の間けいこをさせ、槍の仕合をさせてみては。」

主水は大喜びで引受けた。藤吉郎もお受けして退いた。

（二）

翌日から、上島主水は一生けんめいであつた。

「槍は突くだけの物ではない。敵は長い槍だ。長い槍をはね上げて、すばやく手もとへ突入るのだ。」

五十人の中間に、一人々々、槍はかう突くものだ。「かう拂ふものだ。」と教へたてた。だが、二日や三日で、槍の使ひ方がのみこめるものではない。烈しいけいこに、中間は、みんなへとへとになつてしまつた。

藤吉郎のけいこはまるで違つて居た。

「五十人は三隊になれ。中央の隊が十八人、左右の隊が各〻十六人。槍のほさきを並べて一度に進むのだ。わしが扇で合圖をする。先づ中央の隊は正面から進め。次に合圖をする。左右の隊は横から進め。」

中間は隊を組んで、前へ、後へ、左へ、右へ、合圖通りに動いた。三日程たつと、三つの隊は、絲にでも引かれるやうに、藤吉郎の心のまゝに動くやうになつた。

（三）

いよ〳〵仕合の日が來た。信長は正面のさじきにすわつた。其の兩方に、大勢の家來が並んで見物する。

やがて木下藤吉郎は、五十人の中間に、めいめい十八尺の竹槍を持たせ、隊を組んで進み出た。

上島主水の中間は、八尺の竹槍を持つて、思ひ

思ひに出て來た。

合圖のたいこが鳴つた。

藤吉郎は、扇を上げて、

「かゝれ。」

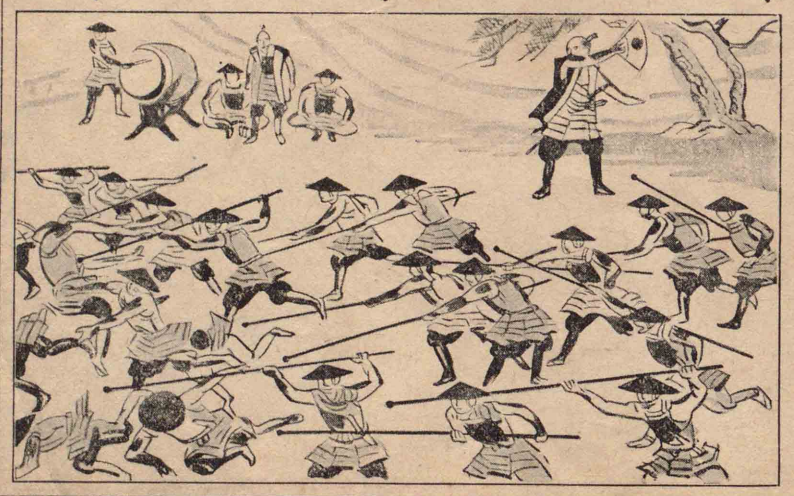
と命じた。　木下軍、中央十八人の隊は、長い槍のほさきを並べて、一せいに突進んだ。

上島軍は、八尺の槍で、敵の槍先をはね上げ、拂ひのけようとあせつた。　しかし、長い槍先をぴたと揃へて突きかゝられては、はね上げるすき間も何もあつたものではない。　たじたじと引きめになつた所を、

藤吉郎は、再び扇を上げて左右の隊に合圖した。

左右の隊は、一せいに横から突いて出た。　上島軍は、もう退くより外はなかつた。　主水は、

「それ、そこを突け。」「それ、



そこを拂へ。」

と大聲に叫ぶ。しかし、五十人ばかりで

ある。

「進め、進め。」

の烈しい藤吉郎の號令に、一せいに進む木下

軍に追ひつめられて、上島軍はさん〳〵に破

れた。

合圖のたいこが鳴りひゞいた。

木下軍は、勝どきをあげて、しづ〳〵と引上げ

た。

第十七　油蟬（あぶらぜみ）の一生

油蟬の子は土の中に住んで居ます。前足が丈夫ですから、けらや、もぐらのやうに、土の中を自由にもぐつて行きます。

大ていは、木の細い根をぢくにして丸い穴を掘り、其の中にはいつて居ます。油蟬の

子の口には、針のやうな管がありますから、其の管を木の根にさしこんで、汁を吸つて生きて居ます。

それにしても、一體此の油蟬の子は、何時、どこで生まれたのでせうか。

夏の末になると、親蟬は、木の皮にきずをつけて、其の中に卵を生みます。卵は、其のまゝで冬を越して、翌年の夏孵るのですが、孵つた時は二粍ぐらゐの、小さい、白いうじのやうなも

のです。此の小蟲が、やがて木を下りて、何時の間にか、柔かい土の中にもぐりこんでしまひます。

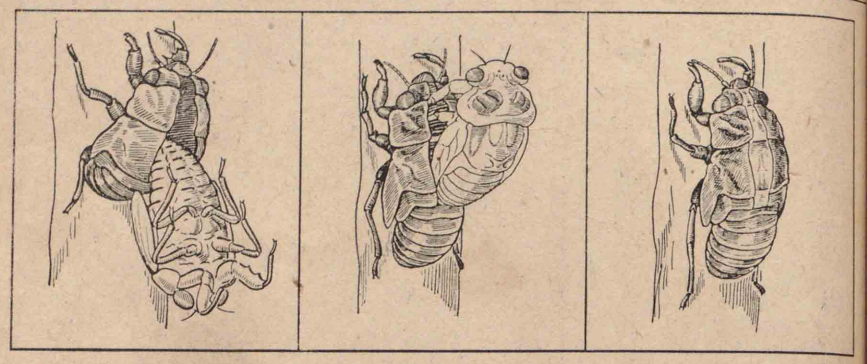
最初は淺い所に居ますが、年を取るに從つて、だん〳〵深い所へはいつて行きます。體も大きくなり、形も色も次第にかはつて、がんじようになります。

土の中へもぐつてから七年目に、やつと長い地下の生活が終るのです。そこで油蟬の子

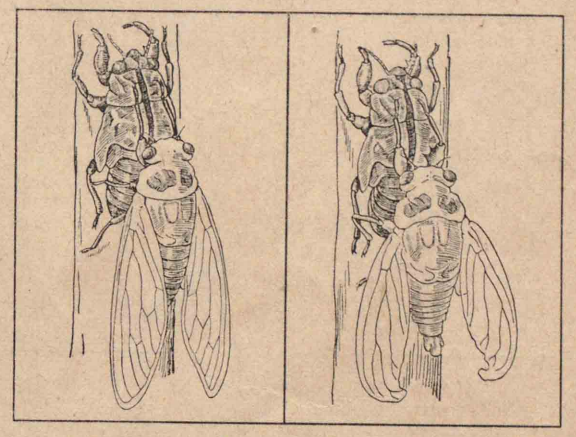
探爪

は、深い所からだん〳〵浅い所へ移つて、地上へ出る日の來るのを待つて居ます。

天氣の好い夏の夕方、油蟬の子は、今日こそと穴から地上へはひ出します。もう鳥などは大てい寢て居ますが、それでも油蟬の子は用心して、急いで安全な場所を探します。木とか草とかに上つて、安心だと思ふと、前足の爪で、しつかりとそれにしがみつきます。すると、ふしぎにも前足はかたく其の場所にくつ



ついて、動かなくなります。其の中に、かたい背中の皮が縦に割れて、中からみづ〳〵しい體が現れます。すぐに背中が出る、頭が出る。續いて足が出て來ます。もう殘つた所は腹の下の方だけです。そこでおもしろい運動を始めます。ぐつとそりかへるやう



にして、頭を後へ下げます。しばらくは、其のまゝじつと動かないで居ますが、やがて起直つたと思ふと、體は完全にぬけ出します。しわくちやにたゝまれて居た羽が、見る見るのびて來ます。色はまだ青白くて、弱々しさうですが、形はりつぱな親蟬です。

夜風に當り朝日に當ると、すつかり色がかはつて、見るから丈夫さうな油蟬になります。

さうして、天氣の好い夏の日を、愉快さうに飛廻り鳴きたてます。

油蟬はそれから二三週間生きて居ます。滿六年といふ長い地下生活にくらべて、何といふ地上の短い命でせう。ところで、此の六年さへたいくつだらうと思はれるのに、外國に

は、十何年も土の中にもぐつて居る蟬がある
といふことです。

第十八　五作ぢいさん

収　昨

「収入役さん、お暑うございます。」
「おゝ、五作さんか。暑いことですね。大分
長い間お惡かつたさうで。どうです、もう
すつかりなほりましたか。」
「ありがたうございます。昨年の暮に寢こ

杖　掛

みまして、ずゐ分皆さんのごやつかいになりました。やつと二月程前から起上つて、今では、どうかかうか杖にすがつて歩けるやうになりました。」
「それは、それは。まあ、けつこうでしたね。こゝへはいつて、少し掛けたらどうです。」
「ありがたうございます。」
「あなたは、病氣上りなのに、わざ〳〵お出でのやうだが、何か用でもおありですか。」

税　伺

「實はその、外でもありませんが、今年は、私のうちへ、まだ税金の通知が來て居ないやうでございます。ひよつとすると、役場の方でお忘れになつたのではなからうかと思ひまして、それでお伺ひに參つたやうなわけでございます。」

「あゝ、其の事ですか。決して忘れたのではありません。」

「では、どうなつたのでございませうか。」

幸　孫　毒　納

「いや、あなたの所は昨年は大へんな御不幸で、働手のむすこさんはなくなられるし、お孫さんは小さいし、よめさん一人を相手に働いて居られる所へ、暮からあなたの長わづらひでせう。まことにお氣の毒だといふので、まあ、今年は納めないでよいことになりました。」

「それは、どういふわけでございます。」

「村會でさうきめたのですから、納めなくて

もよいのです。」

「え、村會で。」

「さうです。此の前の村會で戸數割がきまつた時、あなたは納税免除といふことになつたのです。それで、徵税令書が行かなかつたのです。」

「さうでございますか。ほんたうに皆さんの御親切はありがたうございます。たゞ村のお世話になつて居ながら、少しも税金

を納めないでは、何だか申しわけがないやうな氣がいたします。少しでも納めさせていたゞくわけには行きませんでせうか。」

「いや、五作さん、あなたのお心持はよくわかりました。今日は村長が居られませんが、後でよく話しておきませう。さうして、此の次の村會の時に、あなたのお心持を十分に傳へて、相談してもらふやうにしませう。」

「何とかして、少しでも納めさせていたゞけ

るやうにお願ひいたします。」
「あなたの其のお心掛には、全く感心しました。」
「いや、皆さんの御親切を受けながら、勝手な事ばかり申して、まことにすみませんでした。どうぞ、村長さんによろしく申し上げて下さい。では、これで御免かうむります。」
「お歸りですか。せいぐ〳〵お大事に。」
「ありがたうございます。」

第十九　夕立

いなびかり。
戸をしめた、
目を閉ぢた。
それでもぴかり、
目をさし通す。

雷の音、

またしても、
おそろしく
とゞろき渡る、
屋根の眞上に。

窓の戸を
あけて見る。
ものすごい
雨のどしやぶり。

流か、瀧か。

草も木も、
うれしげに
うちをどり、
池の緋鯉は
喜び勇む。

第二十　笑話

昨日　隣　達

（一）

八歳になる子供、昨日隣へ引越して來た人の子供と、もう仲の好い友達になつた。さうして、

「君は幾つだ。」

「七つだ。」

「それでは、來年は僕とおない年になるね。」

家

（二）

紙に「貸家」と書いて張つて置くと、いたづらな子供がぢきに破つてしまふ。そこで、考へた家主は、厚い板に書いて、しつかりと釘で打附けてしまつた。

厚

「これなら、五六年は大丈夫だ。」

劒

（三）

劒道じまんの男に向かつて、

「昨日は仕合をなさつたさうですね。どんなぐあひでした。」

「それがさ、あつてみると、先方はほんの青二

勝負

歳で、相手にするのもばか〳〵しかつたが、立合ふだけは立合つてやつたよ。

「どんな風でした、勝負の様子は。」

「相手はばかにすばしこいやつで、立上るが早いか、いきなり打込んで來た。これには全く驚いたよ。ところが、そこが日頃の手練さ。」

込手

「どうしました。」

「頭で受けたよ。」

連今朝

第二十一　安倍川の渡し

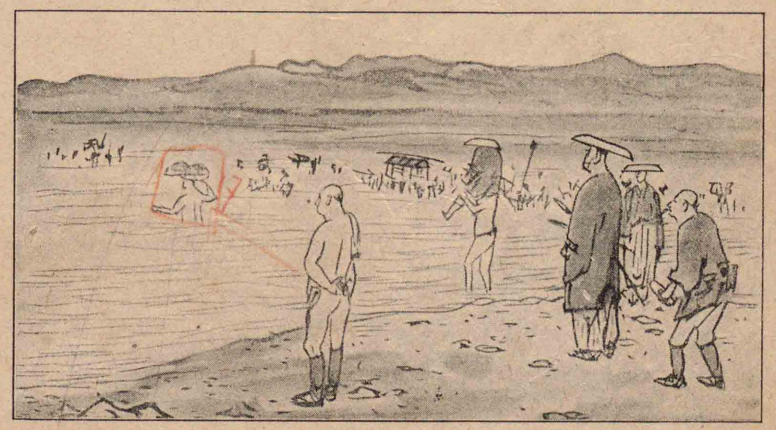
連日の雨で、あふれる程になつて居た安倍川の水も、今朝は大分引いた。「それ、川が渡れる。」といふので、今まで川べの宿場で泊つて、水の引くのを待つて居た大勢の旅人は、我も〳〵と先を争つて渡つた。渡るといつても、水になれた人夫の肩に乗るか、手を引いてもらふかして渡らなければならない。そこで大勢

争

非　　賃安

の人々は、口々に人夫を呼んで、我先に渡らうとする。川べのさわぎは非常なものであつた。

此のさわぎの中に、見すぼらしいなりをした一人の旅人が、人夫と、渡し賃を高い安いと言合つて居たが、どても相談は出來ないものと見切つたのであらう、着



革財布

物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行つた。さうして、ずゐ分あぶない目にあひながら、やう〳〵向かふの岸に着いた。

少ししてから、かの人夫は、何氣なしに先程渡し賃を爭つた場所へ行つて見た。すると、そこに革の財布が落ちて居た。取上げると大そう重くて、中には小判がどつさりはいつて居た。「これは、あの人が落して行つたに違ひない。渡し賃が高いといつて、一人で越した

無里峠

程の人だから、此の大金が無かつたら、氣が違つて死ぬやうな事になるかも知れない。氣の毒なことだ。」と思つて、人夫は、すぐ川を渡つて旅人の後を追ひかけた。

二里程行つて大きな峠へかゝると、上の方から、片はだぬいで、杖を突きながら、かけ下りて來る者がある。見れば先の旅人である。人夫は呼びかけた。

「あなたは、今朝一人で川を越した方ではありませんか。」

「さうです。」

「どうして、又そんなにあわてて引返すのです。」

「落し物をしましたから。」

と言ひ〳〵、かけ出さうとする。人夫は旅人のたもとをおさへて、

「まあ、お待ちなさい。落した物は。」
「革の財布です。」
「中には。」
「小判が百五十兩。五十兩は黄色なきれに包み、百兩は小さな袋に入れてあります。外にまだ手紙が七八通。」
「御安心なさい。こゝへ持つて來ました。」
と言つて、人夫は財布を出して渡した。
旅人はゆめかとばかり喜んで、財布を幾度かいたゞいたが、其の目からは涙がひつきりなしにこぼれて居る。しばらくして、
「家の中でなくした物でも、中々出ないものです。まして、人通の多い渡し場で落したのですから、たとひ飛んで行つて見たところで、もうあるまいと思つて居ました。しかし、此のまゝ歸ることも出來ないので、引返して來ました。いよ〳〵無い時は、川へ飛込んで死んでしまふつもりだつたので

禮(礼)

す。それがあなたのやうなお方に拾はれて、今此の財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは、財布ではなくて私の命でございます。ついては、お禮のしるしに、此の金を半分だけさし上げたうございます。」

と言つて、財布の中に手を入れた。人夫は、

「お止めなさい。あなたから一文でもらふ氣があるくらゐなら、こゝまでわざ〳〵持つては來ません。それよりも道をお急ぎなさい。私はこれでおいとまします。」

と言つて歸らうとする。旅人は「待つて下さい。」と言つて引止めながら、

「私は紀州の者でございます。はる〴〵房州へ出かせぎに行つて、れふをして居ましたが、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのです。小袋の方のは、私どもの主人が國へ送る金です。主

人はなさけ深い人ですから、此の金をあなたにさし上げても、叱るやうなことはないと思ひます。どうぞ、これを受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。それから、あなたのお名前を承りたうございます。妻や子供に、朝晩おねんぶつの代りにとなへさせます。」

人夫は首をふつた。

「お金をもらつたら、あなたの氣はすむかも

知れませんが、私の氣がすみません。私は川端の人夫で、名前を言ふ程の者ではありません。どうかすると、其の日の暮しに困るやうなこともありますが、心にすまないことは、まだ一度もした事はないつもりです。たとひ、家中の者がうゑ死をするやうなことがあつても、あなたから、いはれのない金をもらはうとは思ひません。」

かう言つて、さつさと歸り出した。旅人は、「そ

れでは困る。ぜひ」と言ひながら、人夫の後について來たが、どう〳〵もう一度川を渡つて、人夫の家をたづねて行つた。

見れば、うす暗い小窓の下で、妻らしい人がぼろをつゞつて居り、土間では、七十近い老人がわらぢを作つて居た。旅人が、わけを話してお禮の金を出さうとすると、老人は、ちらと見たきり何とも言はず、妻も「せつかくですが」と言つて相手にならない。

思　　届　　與

旅人は思案に暮れて、どう〳〵役所へ申し出た。役人は、いろ〳〵とくはしく尋ねた上、人夫を呼出して、

「さて〳〵、二人ともまことに心掛のよい者、感心いたした。紀州の男は、急いで國へ歸つて、其の金を間違ひなく届けるやうにいたせ。人夫には、役所から手當をつかはす」。

と申し渡した。さうして、はうびの金をたくさん與へた。

第二十二　夕日

赤い大きな夕日が、今、西の遠い〳〵地平線に落ちて行くところだ。

焼けきつた鐵のやうに眞赤である。たらひ程に見える大きな圓の中には、何か、どろ〳〵ととけた物が動いて居るやうに見える。

地上の緑のあざやかさ、美しさ。遠い木立や、家や、煙突や、みんな〳〵つきりと夕空に浮出し

て居る。

日はぐん〳〵と落ちて行く。一糎、二糎ときざむやうに、動くのがはつきりわかる。もう圓の下の端は、地平線にかゝつた。

沈む、沈む。

圓は次第に半圓となつた。やがて櫛程になつた。あ、どう〳〵かくれてしまつた。

だが、日が落ちた後の空は、何といふ美しさであらう。今沈んだあたりからさし出た幾百

細染　綿　金紅

筋の細かい金の矢が、ダ空を染めて、空は赤から金に、金からうす青に、ぼかし上げたやう。こゝかしこ、眞綿を引きのばしたやうな雲が、金色に、紅に、色づき始める。美しい空である。　はなやかな空である。

第二十三　お月見

鏡のやうな月が、森の上に美しい姿を現した。私たちは聲をあげて喜んだ。　空は水のやう

花　疊

にすんで、風はあるといふ程でもないが、花びんのすゝきがゆれて、其のかげが疊の上にちらついて居る。　小さい妹が手招をして、「お月様、こゝへいらつしやい。」と言つた。

空はいよ〳〵すんで、月はいよ〳〵明かるい。　此の美しい景色に見とれて居る中に、

おかあさんが、枝豆やくだものなどを下さつた。

一番末の弟が、お供物のおだんごをたべたいと言出した。いろ〳〵なだめても中々聞かない。とう〳〵泣出したので、私がおぶつて外へ出た。外の弟や妹も、みんな後へついて出た。

外はまるで畫のやうだ。小川の水は銀の帶ども見え、きら〳〵光る草葉の露は水晶の玉

小帶露

のやうである。蟲は、そつちにもこつちにも、節おもしろく鳴いて居る。

「あれ、松蟲が鳴いて居る。」

と一人が歌へば、みんながついて歌ふ。背中の弟まで、何時の間にかきげんがなほつて、

「ちんちろ、ちんちろ、ちん

節

舌

ちろりん」。

と歌つた。廻らない舌が一そうかはいゝ。

「もう内へおはいり。」

と言ふおかあさんのお聲がしたので、みんな内へはいつた。しかし、何だか此のまゝ寢るのが惜しいやうな心持がした。

惜

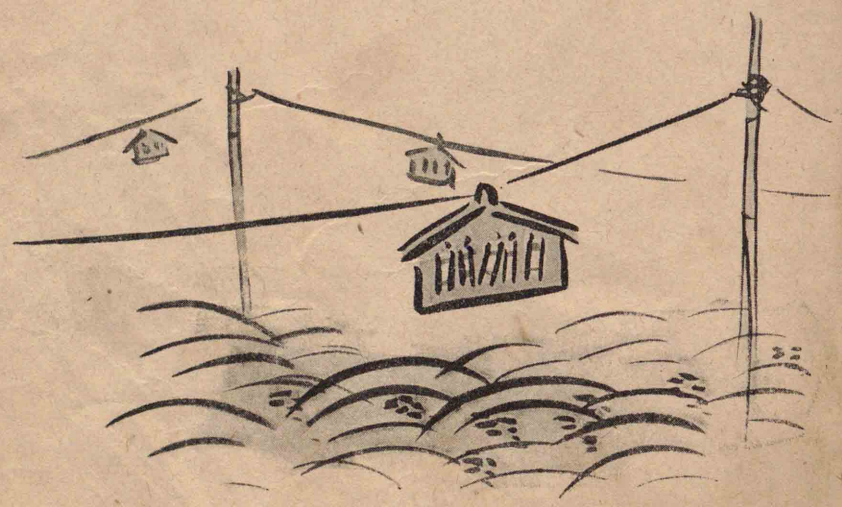
第二十四　鳴子

もずの一聲

霧

朝霧晴れて、
あちらこちらで
鳴子がひゞく。

ひゞく鳴子に
ぱら〳〵ぱつと、
あわて飛立つ
むら雀。



雀見上げて
稲田に立てば、
今日もからりと
秋びより。

第二十五　横濱港

午後、にいさんと港へ行きました。アメリカ行の日本丸が、三時に出帆するのです。横濱に生まれ、横濱に居ながら、私は、まだ外國へ行く船の出るのを見たことがありません。にいさんが連れて行つて見せてやらうと言はれたので、ゆふべから、私は嬉しくてたまりませんでした。

萬國橋を渡つて、税關構内の廣い道を歩きました。

「春子、あれが日本丸だよ。ずゐ分大きいね。」

「まあ。」

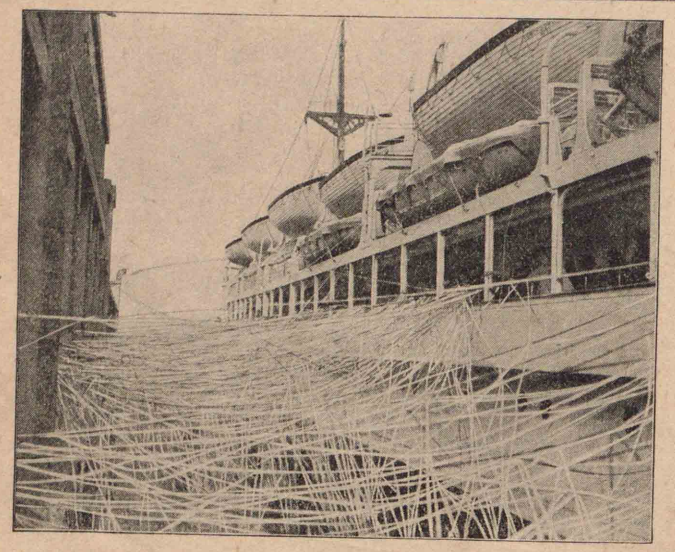
私はびつくりしました。向かふの大きな、長

い上屋の屋根の上に、船體の上部が出て居ます。其の太短い煙突は、まるでガスタンクのやうです。

上屋の中へはいつて、廣い階段を上つた時に、船の方から、何か、けたゝましい音がして來ました。

「どらが鳴つて居る。間もなく出帆だ。」

と、にいさんが言ひました。急いで二階の廊下へ出ました。



そこには人が一ぱい居ました。見送人です。上屋の廊下と向合つて、ついそこに日本丸の甲板があるのです。

今、美しいテープの投合ひの最中です。甲板からこつちへ投げる、こつちから甲板へ投げる。赤、青、黄、紫、あらゆる色のテープが、降るやうに入

互　低

りみだれて落ちて來ます。何十本、何百本、見る間にふえて、後には甲板の人々の顔も、はつきり見えないくらゐになりました。此のテープの端々を、見送る人々と見送られる人々が、しつかり持合つて、互に別れを惜しむのです。

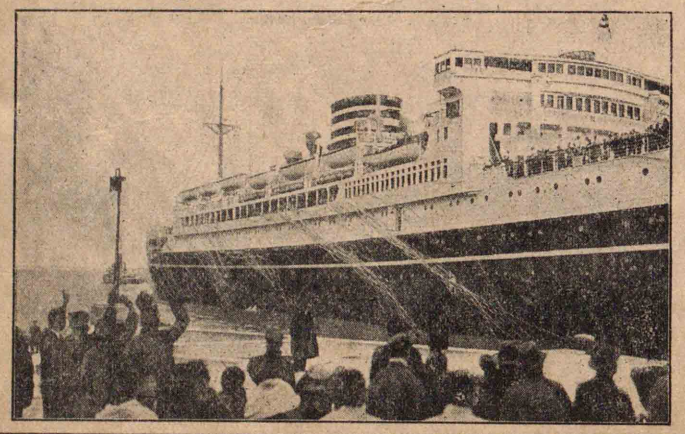
樂隊のしらべが、高く低く、胸をそゝるやうにひゞきます。萬歲の叫び聲が、こゝでもあすこでも起ります。

三時になりました。見通しのつかぬ程大きい日本丸は、少しづつ動き始めました。同時にほえるやうな汽笛の聲。

何千本のテープの美しいみだれと、萬歲々々の叫び聲に、もう何も見えず何も聞えません。

船は次第にはなれました。

片端から切れて行くテープ。

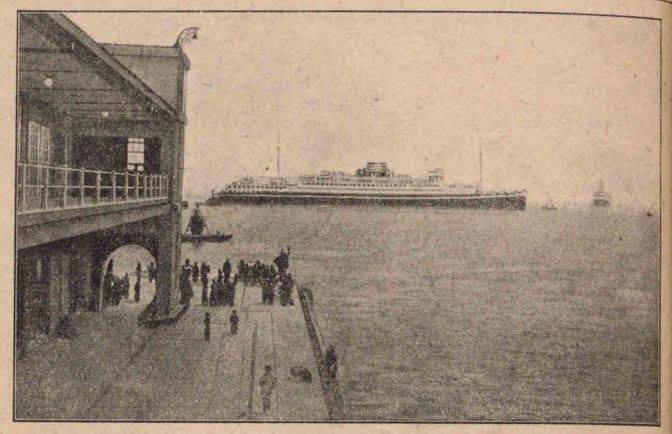


は、美しい束になつて、船べりに大きくゆれ出しました。人々は、互にハンケチや帽子を腕の續く限り振つて、別れを惜しみます。

三分、五分。船の人々は小さくなつて行きます。

八分、十分。もう人々の顔も姿も見えなくなりました。

見送人の中には、ぽつ〳〵歸つて行く者もあります。



氣がついて見ると、さつきまで日本丸のあつた場所は、すつかり海になつて、小蒸氣船が、煙を吐きながら行つたり來たりして居ます。向かふの方には、大きい汽船が三ざう五さうと、幾群も並び續いて、どこからどこまでが港内か見きはめもつきません。

景　乃幼

しかし、あの美しい、はなやかな出帆の光景は、もうどこにもありませんでした。下の岸壁に落散つたテープを、子供たちが無心に拾つて居るばかりです。

「歸らうよ。」

と、にいさんに言はれて、私はだまつてついて行きました。

第二十六　乃木大將の幼年時代

守

乃木大將は、幼少の時體が弱く、其の上臆病であつた。幼名を無人といつたが、寒いと言つては泣き、暑いと言つては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人は、大將のことを、無人ではない泣人だと言つたといふことである。

大將の父は、長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をして居たが、自分の子供がかう弱蟲の泣蟲では、第一藩主に對しても申しわけがない、どうかして子供の體を丈夫にし、氣を強

往詣

くしなければならないと思つた。

そこで、大將が四五歳の時から、父はうす暗い中に大將を起して、往復四粁もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。　泉岳寺には、名高い四十七士の墓がある。　父は、途々義士のことを大將に話して聞かせて、其の墓に參詣したのである。

或年の冬、大將が思はず「寒い。」と言つた。　父は、「よし。　寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

冷浴

と言つて、大將を井戸端へ連れて行き、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。　大將は、これから後一生の間「寒い。」とも「暑い。」とも言はなかつたといふことである。

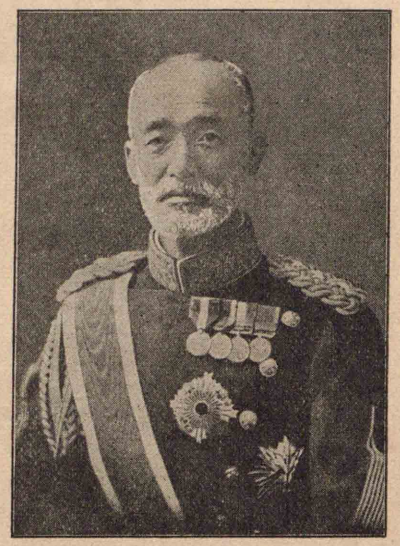
母もまたえらい人であつた。　大將が何かたべ物の中にきらひな物が

あると見れば、三度々々の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將がなれるまで、うち中の者がそればかりたべるやうにした。其のため大將には、全くたべ物に好ききらひがないやうになつた。

大將が十歳の年、一家は郷里へ歸ることになつた。其の時大將は、江戸から大阪まで、馬やかごに乘らず、兩親と共に歩いて行つた。當時、體がもうこれだけ丈夫になつて居たので

ある。

郷里の家は、六疊・三疊の二間と、せまい土間があるだけの、小さい粗末な家であつた。けれども、刀・槍・長刀（なぎなた）など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら〳〵光つて居た。



此の父母の下に、此の家にそだつた乃木大將が、一生を忠誠質素（しつそ）で押通して、武人の手本と

仰

仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

漕烈忽決狂墓途眞妻以潮干洲
冷蛤程側幹香軒部掘泥耕種苗
揃輕計違棒泊現曲醉彼輝儀曇
最初魂柔選活室練汁餅整號奉
裝常精征伐探眉筋怒忠義機械
腕肉阪俗各盛組產在達及的端
復興有縱樹郊誇免塀修理損族
必割振圖職槍限議論貸尺再令
末越粍爪完收昨杖掛稅伺幸毒

納除談隣厚辺非賃革財布里峠
禮屆與染綿疊帶露舌惜霧嬉段
互低蒸吐景乃幼往詣浴郷粗誠

終

昭和十五年九月廿八日修正印刷
昭和十五年十月二日修正發行
昭和十五年十月三日翻刻印刷
昭和十五年十月十八日翻刻發行

小學國語讀本卷七尋常科用
(停)定價金拾四錢

著作兼發行者　文部省
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　石川正作
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

印刷所　東京書籍株式會社工場
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

發行所　東京書籍株式會社

昭和十五年十月四日
文部省檢査濟

著作權所有

初四二元須美子